

木、山、川
ひと、とき
まち、吉野

斧取りて 丹生の松山の
木伐り来て 筏に作り
真楫貫き 磯漕ぎ廻つつ
島伝ひ 見れども飽かず
み吉野の 瀧もどろろに
落つる白波

(巻十三 三三三三)

万葉集に、こんな長歌があると教えてもらいました。世に名高い吉野のヒノキ、また、そのヒノキを筏に仕立てて川を下る途中に見える滝の様子。風土を称えた歌です。吉野が木と川と共に生きてきた場所だということを感じさせてくれます。

『ちよぼくブック』制作終盤の2月半ばと3月半ば、まとまった雪が降りました。吉野の山、吉野の川、吉野貯木のまちが白くなりました。雪がやむと、ぱっと明るい日が差し込みました。春が来ます。



(写真左)『洛中洛外図』に描かれた板葺の家並み。屋根材は当時の吉野の特産品でした。(右)川上村の植林地へ。このスギで樹齢約200年ほど。人々が育ててきた木です。

吉野の山
野口：吉野の植林って、始まったのはいつ頃なんですか。
西本：元禄時代。初めは集落の周辺で焼畑農業をしていて、でも、そんなずっとできるもんちゃうかな。畑にできなくなった場所にヒノキやスギを植えて。
野口：文献なんかには、もっと古くから吉野のスギやヒノキのことが出てきたりしますが、したらあれは天然林のこと？
西本：せやせや。天然林で、ええ木が採れたのは、500〜600年頃。大和平野はずうっと原生林やったけど、都がでるたびに焼き払う。それで木がなくなっただけ。吉野に木が残ったのは、何か理由があったんですか。
西本：吉野の山がなんで守られたか言うたら、金峯山の御岳参りから始まった修験道。こっからこっちは神仙境やから生活のために使う森ではないですよ、ということ

野口：やっぱ、そうなんや。
西本：吉野離宮もそうやな。それが材木として注目されたのは、秀吉の時代になってから。大阪城や伏見城を造るとなると、大きい木が必要になったのがきっかけ。
野口：秀吉が来て、「お、吉野にこっつええ木あるやん」みたいな。
西本：時代的に大きな木材需要があったのと、吉野川という搬送ルートがあったのと、上手いことかみ合うたんやろな。他所のめぼしい林業地の木を使い尽くしてたのもあった。
野口：その時代に作られた『洛中洛外図』にも、吉野の木が描かれてるんですよ。
西本：屋根に葺く木も、奈良から京都に運んできたからな。屋根に板葺いて、石載せて。その頃は一般の人が家を持つ時代になつたんやな。
野口：蓮如が吉野から滋賀にたくさん木を出したりとか、室町時代から戦国時代あたりで、かなり吉

野の木が伐られてるみたいですけど、江戸時代以降は山の管理が厳しくなつた。
西本：世界遺産の修験ルートになつてる尾根筋から一定の距離の木は伐ってはならんというのがあって、今も、雑木が残つるところがあるで。
樽に最適な吉野杉
野口：吉野のスギは、ほかのスギとは全然違うんですか。
西本：灘に産地別樽丸評価記録が残ってるんやけどね。「吉野産は品質極めて良好にして、酒に色づけるには吉野産に限らるごとく樽丸として之に優るものは他に見に能わざるなり」と賞賛されてるんやで。
野口：おおお！
西本：スギも全国にいろんな種類があつてな。大きく分けたら、裏日本のスギと表日本のスギで違うな。
野口：裏と表なんや。



ちょっと聞いていいですか西本さん。



はい、どうぞ。

吉野と木のことをもうちょっと話してみました



西本順藏さんは、奈良県庁で長く林業の仕事に関わってきました。林業、製材業を取り巻く環境が変わる様子を見続けている人です。
 木が好きで、地域おこし協力隊として吉野町に移住して、吉野の木の魅力を伝えることを仕事としている私は、毎日のように西本さんから何かを教わっています。今日は、もう一度改めて、吉野林業の話を読んでみました。
 でもやっぱり少し照れくさかったですね、西本さん(笑)

野口あすか

吉野材振興協議会 常務理事

西本順藏さん

×

『ちょぼくブック』編集長

野口あすか

(写真左) 吉野貯木を見守る材木神社。



貯木が元気やった頃は、お祭りも賑やかで、ごくまきとかしてたって聞いてこれや！って。貯木を見守ってくれている材木神社さんを、もっと大事にしていきたいし、ごくまきも吉野貯木まちあるきで復活です！

かぜひかんようにがんばりや。



西本：日本海側のスギはタンニン

成分などが多くて相対的に木の色が黒い。あぶらみの多い木やな。こっち側のは、あっさりした木で色がきれいで酒樽に向いてる。

野口：ほかに違うところありますか？

西本：植え方が違うな。例えば宮崎のスギは挿し木で増やす。クローンやから性質の同じ木が育って揃った山になる。でも全体的に抵抗力が低い。吉野は実生。種から。バラバラの性質の木が生えてくるけど、それを間引きしながら、木性の良い木を残して育てる林業。密植するから苗木がたくさんいる。挿し木より実生のほうが数多く作りやすい。

野口：フムフム、そうなんや。

西本：吉野林業が発達したのは育てた木を「樽にする」という目的に向けて施業したところにあるんやけども。

野口：色がきれいで目が詰まっています、ほのかな香りが日本酒と相性ぴったりで。でも樽はあまり使

われなくなっちゃいました。

西本：樽丸の需要がなくなると、吉野材の用途が日本住宅の建築用材に変わったが量産はできへんからなあ。吉野材で千戸の家建ててくれ言われてもできん。吉野は「ええもんを少しずつ」という気ままな製材所ですわ(笑)。ほかの産地からしたら、そんなあほなことない(笑)

木の育ち方
木の使われ方を思う

野口：吉野の植林の歴史から考えたら、今って植林できてないです

西本：昔のように間伐材が売れて、主伐までに採算が取れるサイクルにならんと、伐った後に植えられんし、手入れもできんやろな。

野口：苗木が鹿の被害に合うことも大きいって。

西本：昔はな、山の道、そこらの歩道くらいきれいにしてあった。スリッパで行けたで。

野口：言い過ぎですよ！(笑)

西本：いやいや、ほんまや。それだけ皆、山を手入れしたし、人も行き来していたということ。

野口：いまの山どうですか？

西本：ええように変わってもらわなあかんけどなあ。あちこちほったらかして、手入れされた山がなくなってきた。

野口：全国的にはバイオマスとか推進されてますよね。植え過ぎた木を生かすことも、スギとヒノキを皆伐した後をもう少し雑木林に戻すことも大事かもと思うんです。

西本：長い間大事に育てられた吉野のいまある木を、そういう使い方をするのはなんかちゃうなあ。

野口：燃やしてしまいうなら、節がないことや目が詰まってることもそっちのけっていう。

西本：太かったらええという話になるけども、吉野の山というのは、間伐しながら「山全体の木を揃えた山づくり」をしてきたところ。

特別な一本を育てるんやなく、全体として中庸の木を育てるのが吉野やからな。

野口：中庸の木か。

山と町が元気になることを

西本：最近、市(原木や製品の競り市)の回数も減った。こないだのは雪が原因でヘリコプターが飛ばへんだからやったけど。

野口：いつか木が山から出てこなくなったら、吉野貯木、困りますよ。

西本：困るな。なかなか難しいことですわ。貯木の若い人ががんばってたらわんど。

野口：吉野貯木が元気になって、山も元気になったら、日本の林業が元気になると思うんですよ。気が持ちは大事やなって。

西本：若い人みんな、がんばってくれんねやろ(笑)

野口：あっ、そうか。みんながんばります。エイエイオー。



吉野貯木で売買される木の多くは、川上村、あるいは東吉野村で育った木たちです。

川上村には、樹齢200年、300年、なかには400年に届こうというスギが根を張る林があります。桁違いの太さ、高さ。圧倒的な存在感です。古くは江戸時代に植えられました。いったい何人の手で育てられて来たのでしょうか。

現在こうした植林地が、これまでに同様に手入れされる機会は減っています。

理由は複合的です。でもやっぱり大きいのは、「木がお金にならない」ということ。比較的短期間で育ち、大量に流通する材に比べ、手間と時間をかけて育てた「美しくて高価で貴重」な吉野材は、使いつらい材料と見なされてしまうこともあるのです。

市場で求められるのは、より安価な木だったり、質よりも量重視だったり。吉野林業が伝えてきた木の値打ちと食い違ってしまった

現在、次の100年、200年、300年のための「木を植える」ことは、恐らく、とても大変なことです。こうして「大変なこと」なんて書くと、ずいぶん意味が軽くなってしまうようで申し訳ないのですが。

和歌山が主導権を握り、吉野がただただ材木の通過点だった時代。浚渫工事しんせつこうじに莫大な費用がかかって、吉野側は初夏から秋口まで川を使えず、春に出材が集中。結果、材木は買い叩かれて来ました。

そうした状況から抜け出そうと生まれた吉野町の吉野貯木。樽、建築材と商いの主軸を変えながら、製材のまちであり続けています。そして、「木を植える」ことは、これからまた吉野の挑戦の一つになるのかも知れません。

楽しみなプロジェクトが進行中です。吉野中学校の生徒たちの机を、吉野のヒノキで作ろうというものです。

天板を製作するのは地元で木に関わる仕事を営む面々で組んだ

チーム、脚部はオフィス家具や学校教材の大手メーカーが担当します。

この机は、生徒ひとりずつの「自分の机」となって、卒業の際には記念として天板部が各々にプレゼントされる予定です。ちょっぴり甘酸っぱい気分になりますね。落書きや傷がついた「自分の机」の一部分が、吉野町で育つ未来の大人たちへ伝えるもの。

木を植えること、木を使うこと。木が育つ場所のこと、木が使われる場所のこと。木のある暮らしを吉野貯木から、いま考えています。



天板のやわらかな質感はヒノキならではの。きっと大事にしたいくなる机です。

木のある暮らしをかんがえる

(写真左頁) 吉野小学校の運動会にて。芝生のグラウンドの向こうに山。植林されています。吉野貯木の風景です。